

Society of

Elementary

Education and

Curriculum

初等教育カリキュラム学会

第9回大会

発表要旨集録

2025年1月12日(日) 於：広島大学

初等教育カリキュラム学会

9:30～10:00

小中接続期の「書けなさ」の問題 : 読み手意識と書き手としての自己との関係に着目して

永井 ほのり (広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期院生)

「日記を書くときに、なんだろう、『何を思ったんだろう』って考えても、『何を思ったんだろう』って考えること自体もあんまなくて、なんていうか、言い方が難しいんですけど『なんて思ったことにしようかな』みたいなことを考えて書いてました。」—小学校での日記の宿題、読書感想文や行事作文での「書けなさ」にまつわるインタビュー資料等から、書くこと（作文）教育における書き手としての自己について考察を試みる。

キーワード：国語教育、書くこと（作文）、書けなさ、自己形成

10:00～10:30

論理的に解釈する力を育てるカリキュラムのデザイン—学習者の発達段階と読みの視点に着目して—

中田江美 (広島大学附属小学校)

羽島彩加 (広島大学附属小学校)

丸田健太郎 (広島大学附属小学校)

これまで、広島大学附属小学校国語部では「論理」をテーマに研究を行ってきた。このテーマのもと積み重ねてきた実践から、教材を解釈する切り口として「対象の論理」、学習者の思考を解釈する切り口として「主体の論理」という視座を見出し、新たな授業開発の視点に成りうるものとして提案してきた。本発表では、これらの視座を用いた実践を報告し、「論理的に解釈する力」を育てるためのカリキュラムの展望を述べる。

キーワード：論理的に解釈する力、対象の論理、主体の論理、カリキュラム

10:30～11:00

LEPT 分析を活用した「説明的な文章」の学習開発

高橋茉由 (秋田大学)

佐藤宗大 (日本女子大学)

京野真樹 (秋田大学教育文化学部附属小学校)

本研究は、小学校高学年を対象に、LEPT 分析にもとづき、筆者の思いを多面的に捉える「説明的な文章」学習を開発しようとするものである。具体的には学習者が『鳥獣戯画』を読む（高畑 勲）を題材に、筆者の自らの情熱や価値観を表現する姿に体験的に出会い、「最適な表現メディアの選択」という活動を通して、学習者自身も自らの思いを表現していく活動を構想した。なお、本研究は JSPS 課題番号 24K00421 の助成を受けている。

キーワード：LEPT 分析、メディア志向特性、論理、読解プログラム

11:00～11:30

国語教科書の外国文学作品における翻訳アダプテーション

李佳蔓（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期院生）

本発表では、日中韓小学校国語教科書における外国文学作品の歴史と受容を考察し、翻訳アダプテーション視点から日中韓三国の小学校国語科教育の現状と特徴をまとめる。さらに、外国文学作品の翻訳アダプテーションが日中韓の児童教育に与える影響と意義を再確認する。

キーワード：国語科教科書、外国文学作品、翻訳アダプテーション

11:30～12:00

戯文から生成した問いと対話を通して「自分の読み」をつくり出す文学の授業 -小学校教諭と大学教員によるアクションリサーチ（小学校第5学年「たずねびと」）-

山田深雪（玉川大学）

嵐右京（帝京大学小学校）

本研究では、戯文（山田・河上、2022）による「問い」の生成とその追究のための対話を通して、「自分の読み」をつくり出す学習者の育成を目指した。そのために、第5学年国語科教材「たずねびと」の授業実践に際し、帝京大学小学校の嵐教諭と大学教員の山田による「共創的なプロセス」を重視したアクションリサーチを実行した。発表では、授業実践構築のプロセス、授業実践の実際と考察、我々の変容等について述べる。

キーワード：戯文、問い、対話、文学的な文章の指導、アクションリサーチ

10:00～10:30

「自立した読者」を育成する文学的な文章の授業の構想と実践—文学体験の成立に着目して—

重廣孝（広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻院生）

松本仁志（広島大学大学院）

読むことの教育の目標は、自らの力で読みを創り出し、それを基に自己や世界を問い直し続ける「自立した読者」の育成である。文学的な文章の授業において「自立した読者」を育成するためには、文学体験の成立が鍵となる。本研究では、文学体験の成立に向け、複数の虚構の人物の立場に立つこと、多層的な作品世界を構築することの二つを核とした文学的な文章の授業の構想とそれに基づく実践について発表する。

キーワード：「自立した読者」、文学体験、作品世界の構築、身体性

10:30～11:00

中国の児童文学者の洪汎濤と曹文軒の児童観について

姜楠独伊（広島大学大学院人間社会研究科博士課程後期院生）

本発表は、中国の児童文学作家である洪汎濤および曹文軒の主要な児童文学作品を対象に、それらが日中両国の教科書においてどのように活用されているかを考察し、比較するものである。これを通じて、中国児童文学の発展がどのように中国における「児童観」の変遷を反映しているかを明らかにすることを目的とする。

キーワード：中国児童文学 児童観 児童文学と教材

11:00～11:30

生活科における自分自身への気づきを促す授業に関する研究動向—スコーピングレビューを用いて—

藤井麻央（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期院生）

本研究では、生活科において自分自身への気づきを促す授業に関する研究がどのように行われてきたのかを、文献整理により明らかにすることを目的とした。研究方法は、体系的にデータの収集・検討を行うため、スコーピングレビューを用いた。データはCiNi Researchで検索し、日本の

学術論文を対象にした。以上を踏まえ、自分自身への気づきを促す授業に関して、今後どのような研究が求められるか考察する。

キーワード：生活科、自分自身への気づき、スコーピングレビュー

11:30～12:00

生活科の意義についての再検討 ―ホリスティック教育の視点から―

坂本圭（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期院生）

カリキュラムマネジメントや、学際的な単元の意義が高まる昨今において、幼小接続における教科マネジメントの要である生活科もまた、その重要性を増している。一方で、〈探究〉の原理が肥大化し、その本質について輪郭が曖昧化している帰来もある。自己と生活世界との〈かかわり〉を学習原理とする生活科について、全人的な教育を志向するホリスティック教育の立場から、改めてその意義を検討する。

キーワード：生活科、ホリスティック教育、オルタナティブ教育

11:00～11:30

英語「で」学ぶ子どもを育てるための小学校外国語科の授業開発 —CLIL（内容言語統合型学習）に着目して—

山田竜誠（広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻院生）

本研究の目的は、CLIL（内容言語統合学習）に着目した小学校外国語科の授業を開発し、児童の言語理解と内容理解への有効性を検討することである。そこで、第6学年単元” Save the animals”（東京書籍）を事例として、英語「で」動物の住処や食物連鎖を学ぶ学習を児童の発話やワークシートから分析する。また、MI（多重知能理論）の考え方にに基づき、児童がもつ8つの知能を生かして取り組める活動の具体についても述べる。

キーワード：小学校英語・CLIL（内容言語統合型学習）・MI（多重知能理論）

11:30～12:00

学校生活へのよりよい適応を支援する道徳教育プログラムの開発 — Program Based Approach by Optimal Design (PBAOD) による小学校4年生の実践をもとに —

森川敦子（比治山大学）

高橋均（広島大学）

本研究の目的は、論者らが開発した Program Based Approach by Optimal Design (PBAOD) に基づき、学校生活へのよりよい適応を支援する小学校4年生の道徳教育プログラムを開発することである。そのため、小学校4年生を対象にソーシャルスキルトレーニングと道徳科、学級会を組み合わせる全7時間の道徳教育プログラムを2種類作成し、学校適応感、規範意識の面から効果を検討する。

キーワード：道徳教育、プログラム開発、学校適応感、規範意識、ソーシャルスキル

9:30～10:00

持続可能な林業のあり方を考える初等社会科授業の開発

西畑郁希（広島大学附属東雲小学校）

本研究の目的は、持続可能な林業のあり方を考える初等社会科授業を開発・実践・検証し、児童の具体的な姿からその有効性を明らかにすることである。まず、従来の「森林」を扱った社会科授業の課題を見出し、森林や林業に関する学問の基礎研究を行ったうえで持続可能な林業として定義づけ学習内容に位置付ける。次に、社会諸科学の知見を踏まえた単元構想を行い、授業実践・検証を通してその成果と課題を明らかにする。

キーワード：持続可能性、林業、初等社会科

10:00～10:30

小学校社会科における「教科書の教科教育学的研究」の展望 —2010年代以降のデジタル化をめぐる文部科学省の動向をふまえて—

大野木俊文（鹿児島大学）

長山弘（盛岡大学）

本研究の目的は、小学校社会科における「教科書の教科教育学的研究」の展望を開くことである。研究方法は、次のとおりである。

- ①小学校社会科における「教科書の教科教育学的研究」の成果をレビューする。
- ②2010年代以降のデジタル化をめぐる文部科学省の動向を把握する。
- ③上記の結果をふまえ、小学校社会科における「教科書の教科教育学的研究」の展望を開く。

キーワード：小学校社会科、「教科書の教科教育学的研究」、デジタル化、文部科学省

10:30～11:00

「ファースト GIGA」から「セカンド GIGA」のフェーズへ 整備から利活用への移行～小学校デジタル教科書・教材（地図帳）を事例に～

岡本龍治（株式会社 帝国書院）

GIGA スクール構想、つまり「ファースト GIGA」により、義務教育の学校では環境整備はほぼ完了している。次のステージ、「セカンド GIGA」では、本格的な利活用のフェーズに移行する。そこ

で、手軽な ICT の利活用として、デジタル地図帳の利活用を提案したい。地図帳は社会科の教科書だが、国語辞典と同様に他教科でも活用できる内容が盛り込まれている。本発表は ICT の利活用に苦手意識を持っている教職員、児童に向けた活用例を紹介する。

キーワード：セカンド GIGA、整備から利活用、デジタル地図帳

11:00～11:30

小学校教師の「専門性」に関する研究—岸本清明氏を事例として—

吉川修史（兵庫教育大学）

本研究の目的は、①小学校教師の「専門性」とは何なのか、②小学校教師の「専門性」はいかに形成されるのか、③小学校教師の「専門性」は教師後の人生にどのような影響を与えるのか、という3点を明らかにすることである。本研究では、兵庫県立公立小学校元教諭の岸本清明氏へのインタビューや、岸本清明氏の論文・書籍等を手がかりとして、小学校教師の「専門性」について考察していく。

キーワード：小学校教師、専門性、自治、総合学習、ジェネラリスト

11:30～12:00

小学校社会科の目的と接続するプログラミング的活動に関する研究 —アンプラグドプログラミングによるチャート図作成—

小田泰司(福岡教育大学)

平成 29 年 3 月に告示された『小学校学習指導要領 総則編』にはプログラミング的思考の育成が盛り込まれていた。そこには「プログラミング的思考」を育むことについて、各教科等の内容を指導する中で実施する場合には各教科等での学びをより確実なものとすることが記されていた。本発表ではこれらに応えるために、小学校社会科の目的と接続するプログラミング的活動について報告する。

キーワード：小学校社会科、プログラミング的活動、チャート図作成

9:30～10:00

若手教員の算数科授業における協同的省察に関する研究 — 「授業者の改善に向けた問い直し」を促す応答関係に着目して—

村上良太（比治山大学）

本研究は、算数科授業における協同的省察において、「授業者の改善に向けた問い直し」を促す応答関係（仮説）に着目し、その有効性を検証することを目的とする。検証は、採用5年目の若手教員と、算数科を専門とする他者（筆者）との協同的省察に関する事例研究を通じて行った。本発表では、得られた成果と今後の課題について報告する。

キーワード：省察、教師教育者、算数科授業

10:00～10:30

定年退職を迎えた教師教育者のセルフスタディ：ライフヒストリー法によるアイデンティティの再構築を中心に

木原成一郎（広島大学名誉教授）

久保研二（広島大学）

中西紘士（広島修道大学）

本研究の目的は、定年退職を迎えた教師教育者である筆頭著者の教師教育者としてのアイデンティティの再構築過程を明らかにすることである。研究の方法は、筆頭著者が語ったライフストーリーをクリティカルフレンドである第2及び第3著者とともに、授業資料や教育制度等の事実を踏まえてライフヒストリーとして構築する。そして筆頭著者の教師教育者としてのアイデンティティの構築過程を解釈し今後の成長課題を考察する。

キーワード：教師教育者、セルフスタディ、定年退職、教員養成、ライフヒストリー

10:30～11:00

教師の学校外自主研修会における学びへの意味付け—UDL(学びのユニバーサルデザイン)研究会に参加する教師の語りから—

福井佑季（東京大学大学院教育学研究科修士課程院生）

【研究の目的】

小学校教員が学校外自主研修会での学びをどのように意味付けているかを明らかにする。

【方法】

事例となる UDL 研究会に参加している教師 3 名に半構造化インタビューを実施した後、質的データ分析法(佐藤 2008)を参照しつつ分析を行った。

【結果と考察】

様々な教師と出会う場であり、またそこでの学びを私的なものとして閉じるのではなく、勤務校への還元という形で同僚との関わりを持とうとしていること等が示唆された。

キーワード：教師研究、学校外自主研修会、UDL(学びのユニバーサルデザイン)研究会、意味付け

11:00~11:30

児童の障害理解を促すための題材開発

益田天喜(広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻院生)

これからの共生社会の実現のためには、小学校段階からの障害理解教育が必要不可欠である。そこで、本研究では、児童の障害理解の発達段階に応じた「児童の障害理解を促す題材開発」を目標に掲げ、計 25 日に及ぶ小学校でのアクションリサーチ実地研究を基に実際に行った授業実践の分析とその成果物への考察を研究方法としている。また、ICF が示した障害観を基に、児童の障害に対する考え方を再検討するための題材開発となっている。

キーワード：障害理解、小学校、アクションリサーチ実地研究、ICF、障害理解教育

11:30~12:00

吃音のある児童の包摂をめざした国語科授業の構想—音声言語コミュニケーションを中心に—

伊井健(関西学院大学大学院教育学研究科博士課程後期院生)

本研究の目的は、発話において困難のある吃音のある子どもに応じた国語科「話すこと・聞くこと」の授業を提案することである。本研究では、音声言語コミュニケーションに関する規範が社会的に形成されているという問題意識から、音声言語の多様さについて考える授業を構想する。また、授業提案では、絵本を活用することで、コミュニケーションの難しさや楽しさなどについても考えることができる学習を構想する。

キーワード：吃音、「話すこと・聞くこと」、絵本、音声言語コミュニケーション

【シンポジウム】

テーマ：〈初等教育の〉教育課程は”誰”のものか

1. 日 時 令和7年1月12日（日）13:30～15:45

2. 会 場 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学教育学部 L205

3. 趣 旨

社会のデジタル化や地球温暖化、環境汚染、国際緊張、感染症などにより初等教育の現在と未来が危うい状況に陥っていないでしょうか。本学会では、子どもたちの成長が阻害されれば、それは人間社会の存続に関わる事態になりかねないという危機感のもと、我が国の初等教育カリキュラムや授業実践の背景や課題を明らかにしつつ、子どもと教師のウェルビーイングに向けた考え方を提言する『初等教育の未来を拓く ―子どもと教師のウェルビーイングに向けて―』をまもなく刊行させていただくことになりました。

本シンポジウムでは、出版企画第2弾として教育課程を取りあげます。学校の教育課程は誰のものか、誰に向けて誰が作り、誰が運営するのか、教育課程は国家が作成・運営・統制するものでしかないのか、地域社会や市民が担い手となることはできないか。

教育課程におけるこういった根本的な問題を、初等教育の立場から登壇者に論じていただくとともに、フロアを巻き込んで、初等教育カリキュラム学会ならではの領域横断的な議論を行っていきたいと考えます。

4. 登壇者など

(シンポジスト)

永田忠道氏（広島大学）

（第9章 学校の教育課程の編成と実践 担当）

吉川修史氏（兵庫教育大学）

（第11章 社会に開かれた教育課程の理想と現実―持続可能な社会の実現をめざして―担当）

黒川麻実氏（愛知県立大学）

（第13章 社会における初等教育の位置と関心―個の視点と社会の枠組みから捉える初等教育―担当）

(コーディネーター)

難波博孝（安田女子大学）

（第19章 初等教育に関する学術研究の課題と展望 担当）



The Society of Elementary Education and Curriculum

初等教育カリキュラム学会 第9回研究大会

発表要旨集録

発行日 : 2025年1月12日(日)

発行・印刷: 初等教育カリキュラム学会

〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1

広島大学教育学部 気付